

# フィリピンスタディツアー 2017 夏休みレポート集



実施時期: MANILA 2017年8月12日(土)~14日(月)CEBU 8月15日(火)~19(土)



特定非営利活動法人 八口八口

東京都江東区深川 1-1-2 403 TEL/FAX 03-5875-9923

### ◆ 2017 夏 スタディツアーを終えて

今回は多くの方が行き交う視察会となりました。本来はマニラ 1 名、セブ 3 名での実施ではありましたが、両事業地共に 1-2 日の視察会参加者がおりマニラ 2 日目 7 名、セブ 1 ~2 日目 5 名、3 ~4 日目 4 名になるなど、人が入れ変わりながら行なった 1 週間の視察会となりました。

そのような環境の中でも、参加者の皆様が協力しあい途中参加の方を交えて有意義な 交流を図って下さったことが大変印象深かったです。皆さんがフィリピンのローカル地 域の人々に歩み寄って下さったことで、地域の人々も、今まで触れたこともなかった日 本の文化や人々に対して理解を深めることができました。弊団体の視察会にご参加いた だき、私たちの現場に貴重な機会をもたらしていただき、ありがとうございます。

ぜひ私たちの現場で得た体験を、皆様のご家族やお友達にもお話いただき、世界とと もに生きる機会をハロハロとともに広げて下さったら嬉しいです。

ハロハロは今後フィリピンの人々にとっても日本や他の国を訪れ豊かに生きる機会に つながっていくよう平等な機会創出を行ないたいと考えています。皆様のお力添えをど うぞよろしくお願いいたします。

ハロハロ理事長 成瀬悠

#### ◆ 収支ご報告 (\*1 日視察会も含む)

(収入) 300,920 円 参加費: 264,920 円 サポーター会費: 36,000 円 (支出) 300,920 円

宿泊費 27,570 円 人件費 39,615 円 飲食費 28,405 円 雑貨制作費 3,910 円 旅費交通費 96,240 円 現地団体寄付金 24,150 円 事務経費 25,000 円 ハロハロ会費 36,000 円 ハロハロ寄付金 20,030 円

- \* 皆様からの参加費の一部は、マニラ現地協働団体 Paaralang Pantao、Samakabai、セブ 現地協働団体 Tulay sa Kinabuhi、そしてハロハロの活動を支える寄付金として活用さ せていただいております。
- \* この現地視察会実施にあたり、事業実施地域の中に臨時収入の機会が生まれたことをお 礼申し上げます。



学校に行きたくても家族のために働く子供達と 学校と勉強用具があるような恵まれた状況でも 勉強が嫌いな自分

山奥のゴミが置いてある場所で住んでいる子供達を見て そのような自分が恥ずかしくなりました。

それでもまだ勉強が「めんどくさいな」「嫌だな」と思います。

今すぐに変わることは出来なくても 自分ができることを少しずつやっていきたいです。

### 現地視察会感想 vol.2

今回のスタディツアーは、私にとって2回目の訪問となりました。

前回の旅で、シティオホープの皆さんからたくさんのパワーを貰いました。

日本に戻ってからも、前回のステイで出来た友人達が、私の拙い英語でもメールのやりとりを続けてくれて、つらいことがあった時には励ましてくれたりしました。

また絶対に戻りたいと思い、たった3か月後の出戻りとなりました。



今回も、周りの目を気にせず幼い頃に戻って、一心不乱に子供達と遊びました。 自分自身、周囲と比べるとけして裕福な出身ではなく、経済的に不自由な思いをすることが多かっ

た幼少期ですが、近所のお兄さんお姉さん、大人達が遊んでくれたことは、自分が大人になった 今でも愛を感じ、自分に自信が持てる思い出となっています。

現地の問題解決には何一つ貢献出来ていませんが、何のスキルも無い分、とにかく子供達とふざけて、楽しい思い出を提供出来るように全体力を使って遊びました。

シャボン玉や大縄跳びで遊んだり、英訳された日本の絵本を持って行って読み聞かせをしました。

大人に内緒で子供達と村を抜け出してアイスクリームを買いに行ったのは、自分が幼い頃、子供 だけで買い食いをした思い出と重なりました。

大人も子供もセルフィーが大好きで、特に子供達は教えなくてもスマホと自撮り棒の操作方法を覚えてしまい、自由に自撮りを楽しんでいました。笑い話のようですが、子供の能力というのはすごいものだと思いました。

そして今回は、井戸で服を着たまま体を洗いました。たくさんの子供達に囲まれ、世話を焼いてもらいながらのお風呂は、とても楽しいものでした。

村の女性達は、髪の毛をねじってカールをつけたり、日本人の目から見れば不自由な環境でも、 可愛くおしゃれを楽しんでいました。

ステイ先の娘さんが、お母さんと一緒に G パンを細く縫い直してスキニーにし、それを履いて登校 して行く様子は、同じ女性として心踊るものがあり、また、愛情を感じる光景でした。

相変わらず道路は泥だらけ水溜まりだらけで動物の糞が落ちていて、村の奥にはゴミの山があり、 異臭が漂っている。

ですが、日本のような便利さはありませんが、常に周りに人がいて、音楽が流れ、孤独がありません。

どちらが幸せかは比較するものではなく、日本では忘れられた毎日の楽しみ方があり、豊かさが あると私は感じました。

本当に幸せな3日間でした。



今回、フィリピンに 10 日弱滞在し、生きがいと仕事の関係について改めて考えさせられました。

市場へ買い物へ向かうときに乗ったトライサイクルの運転手をしていた少年は、経済的な事情から学校に通うことを諦めて家計を助けるためトライサイクルの運転手をすることにしたそうです。また、ホストファミリーの女の子の希望する職業にしても将来カレッジに進学することが必要と聞きます。

生活をするための仕事と自分の生きがいとしての仕事が一致してそれに従事することができれば 一番理想だと思いますが、経済的な事情によりそれを選択することができない状況があり得ると いうことがリアルに感じられました。

仕事を選択するとき、自分でそれを選び取った、という意思、その存在は仕事のやりがいや仕事 をすることから得る幸福度との関係で重要なことなのではないかと自分自身のこれまでを振り返っ てみてもそのように思います。

ただ、わたしが滞在した村の人たちは日本では考えられないくらい家族や 地域の人たちとの密なコミュニケーションを持っていてその側面からの幸福度がとても高いように 思えました。

日本のサラリーマンのように朝から晩まで仕事に明け暮れているとなかなかあのような密なコミュニケーションをとることはできないと思います。

仕事での生きがいやりがいと、身近の人たちとの密なコミュニケーションとは天秤の関係にあるのかもしれないと思いました。

わたし自身は、どちらかというと密なコミュニケーションよりも仕事の充実度を

追求したいタイプですが、わたしがフィリピンから帰ってきて最近よく考えるのは、仕事の充実度と やりがいを追求し、なおかつ周りの人たちとの密なコミュニケーションもとり両側面から最大の幸 福を得ることができるものなのか、ということです。

わたし自身は先ほど述べたように仕事での充実度を優先したいタイプですが、

仕事は生活費を稼ぐための手段と割り切って仕事以外での部分で幸福を追求するタイプの生き 方、自分と違う生き方のタイプも肯定したいと思うようになりました。

それは、自分自身がいままで当たり前に肯定していた、「仕事はやりがいのある仕事をすべきだ」という命題そのものについての真偽と、真だとすればその理由は何か、ということをフィリピンから帰ってきて考えるようになったからだと思います。とくに理由のところについては自分自身の生きる意味への回答でもあるかもしれないな、と思いました。

以上

## 現地視察会感想 vol.4

### ☆ごみ処理問題

凄まじい臭いだった。どれだけ経っても決して臭いに 慣れるということはなかった。情報として、ごみ捨て場で 暮らしている人々がいるということは知ってはいたが、 現場に行ってみると改めて強烈な環境に驚く。こんな所 で暮らしているとは、トラックでゴミがやってきて、その ゴミに群がる人たち。日本では考えられない光景だった。

日本でごみは焼却処分されるが、フィリピンでは焼却処分されない。なぜ焼却しないのかは、わからない。政府のやる気の問題なのか、技術の問題なのか、お金の問題なのかはわからない。ただ、政府に文句をいっても始まらない。少しでも環境をよくするために、できることをやっていかなければならない。行政とも粘り強く対話を重ねながら、現地でできることをやっていくことが大切だと感じた。



タリサイ市のごみ処理場(ダンプサイト)





船のエンジンとドアマット作成中

### ☆自主的な運営の大切さ

今回、漁村やドアマット作成なども見学させてもらった。 漁村ではマイクロファイナンスでエンジンを購入して、より多くの魚が捕れるようになり、ドアマットなどの作成の 方でも副収入を得られるようになったそうだ。どちらにも 共通しているのは、自主的な運営だ。支援が必要な部 分は協力するが、基本的には現地の人たちで事業を運 営しているそうだ。支援をする際、こちらの思いを押し付けてしまうこともあると思うが、現地の人が自立できる形で支援を行うことが必要だと思った。いかに現地の人が自分事としてとらえて、モチベーションを持って事業を継続していくことができるかが大切だと思う。

### ☆みんなありがとう。

参加者、スタッフ、村の人々、そして特にホームステイ先のみんな、ありがとうございました。このスタディーツアーでは本当にたくさんのことを学べましたし、今後の活動に生かすことができそうです。村の人々も本当に優しくて、親切で、なに不自由なく、楽しく暮らすことが出来ました。このツアーで学んだことと感謝をいつかお返しできるように今後頑張っていきたいと思います。



ホームステイ先